

介護 DX 関連機器の先行的導入事例(サンシティ北条)

DX 関連機器を先行的に導入している事業所さんの声を集めるインタビュー企画。

初回は、高齢者総合福祉施設「サンシティ北条」(社会福祉法人白寿会)

常務理事 芳野 洋心さんにお話をうかがいました。



－介護 DX に目を向けた「きっかけ」－

【市】

介護記録システムや見守り介護ロボットなど、開設当時から、デジタル技術を活用した施設運営をされていますが、いち早くDX機器に目を向けられた「きっかけ」を教えてくださいませんか？

【芳野氏】

科学的介護という言葉が出始めたのが、ちょうど「サンシティ北条」の開設準備の時期だったと思います。国の方針として、将来的には、テクノロジーを取り入れた介護現場になっていくだろうと、その頃から思っていましたね。アトムグループは、ICT を積極的に導入しています。そういった背景もあって導入しやすかったのだと思います。

－「ヘルプパッド」の全床導入－



【市】

最近では、こちらの施設の排泄ケア関連の介護ロボット:「ヘルプパッド」の全床導入が、全国的に注目されています。「ヘルプパッド」を導入してみたの感想をお聞かせください。

【芳野氏】

利用者さんの負担が少なくてすむ。これがいいですね。

これまでの排泄確認は空振りも多くありましたが、この「ヘルプパッド」はAIが臭いで排泄を検知します。布団をめくって、利用者さんを起こして確認する必要がありませんから、安眠を妨げなくてすみます。冬場は特に寒いですからね。

【市】

スタッフさんや利用者さんの反応はどうか？

【芳野氏】

現場のスタッフからはとても好評ですよ。今となってはなくてはならない感じですね。

利用者さんからは、排泄後にすぐ対応してくれるのは、快適性といいますか、自分の尊厳を大事にしてくれている、といった声がありますね。

ご家族の方にも、排泄ケアについて入所時に説明し、ご安心していただいています。

【市】

こうした機器の導入は、利用者さんやご家族が、入所施設を選ぶ際のポイントの一つにもなりますよね？

【芳野氏】

大きなポイントになると思いますね。今は色々な情報がスマホ一つで手に入ります。

御自身が調べられて入居するケースもあります。

受け入れる側としては、館内の Wi-fi 環境であるとか、先駆的なロボットを入れているなど、条件が整ったところを選んで来ていただけているのかな、とは思いますがね。

【市】

デジタル技術の導入は、ケアの質の面ではどのようにお感じですか。

【芳野氏】

今回の例で言えば、排泄は、これまで、経験や勘に頼る部分があったと思います。

そうなると、入社1年目とベテランとではどうしても差が出る。

これが、ヘルプパッドの導入によって、排泄の客観的なデータを掴むことができる。

経験値ではなく、実際のデータとして、可視化できるので、若手でもベテランでも、排泄データの見方だけ正しく理解しておけば、キャリアの差は埋まってきます。

排泄はデリケートな部分ですから、若手であっても、ベテランと同じように取り組めるのはよいことだと思

います。

【市】

排泄系の機器の普及は進んでいるのですか。

【芳野氏】

記録システムや見守り系の機器は、徐々に普及が進んできています。機械が得意とする分野ですから。一方、排泄は、利用者さんにとって同じ排泄が2度とありませんから安定したものではない。不安定さは機械が苦手なんですかね。導入の進みにくさにつながっている感じはします。

【市】

排泄系は導入が進みにくい分野ということであれば、「ヘルパッド」を段階的に導入するといった選択肢もあったと思うのですが、全床導入に踏み切った理由を教えてください。

【芳野氏】

段階的に導入するといった考えは私にはなかったですね。全部やるか、やらないか。なぜかという、段階的な導入では業務のオペレーションが2本立てになるからです。するなら全床導入。施設全体の排泄系オペレーションを変えましょうということです。単純明快です。役員から、まずは半分だけといった声もありました。それをやると現場は大変です。やるなら全床でやらせてください、それがダメならやりません。それぐらいの意思表示はしましたね。

－DX機器導入のプロセス－

【市】

「ヘルパッド」などのDX機器を導入する際、どのようなプロセスを踏んだのですか。

【芳野氏】

当然、上の方にも相談はしますが、現場の声重視ですので、「この機器を導入する」といった最終的な決定は、役員ではなく現場サイドで決めています。

今回の排泄に関していえば、ヘルパッドを含む3つの機器にフォーカスし、最終的にどれにするか検討しました。それぞれに特徴がありますから、現場でデモなどしながら、最終的にこれでいこう、こういった決定のプロセスを踏みました。

機器導入後も、軌道に乗るまでは色々ありますから、リーダーを中心に、チームの中で解決できるような仕組みを作っています。

また、メーカーさんのサポートも大事です。

事前研修に始まり、導入後も、定期的に施設やオンラインで説明を受けるなど、週1回のペースで何か打ち合わせしている感じですかね。こうしたフォローはすごく大事です。

機器を入れて終わりといった関わりもあるのでしょうか、排泄は双方向なんです。

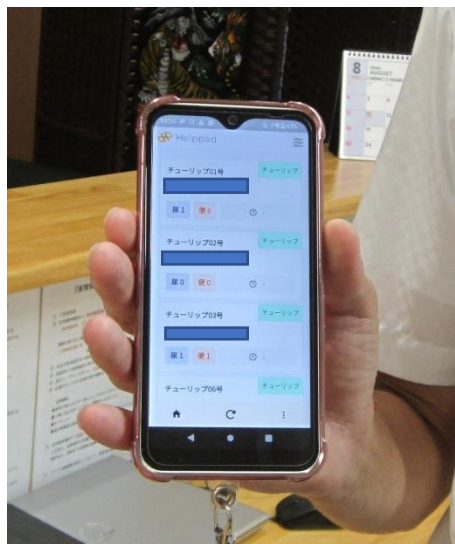
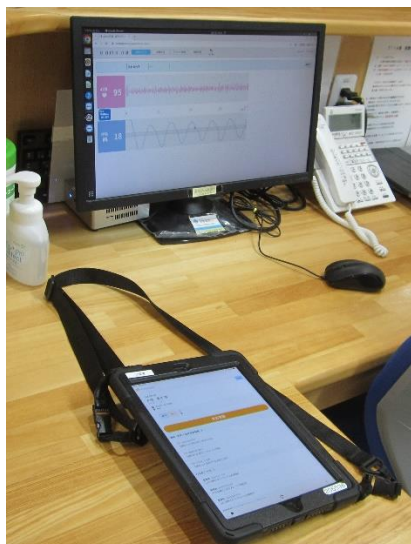
メーカーさんには、「画面をここに、こうしてほしい」とか、職員が使いやすいように、「ここに、こんな画面があつたらいい」とか、結構要望は伝えていますね。

なかなか要望を言っても通らないところもあると思いますが、

今回のヘルパッドを開発しているメーカーはスタートアップでしたので、柔軟性があつたと思います。

事業者とメーカーが常にやり取りしながら精度を上げる、良くする。

自分たちの要望が形になる、そういうのは面白いですね。



－介護現場の課題解決のヒント－

【市】

DX推進のヒントはどのようにして得ているのですか。

【芳野氏】

私自身の性格とかもあると思うのですが、日々歩いて現場を回っていますね。

普段から職員と話す。その中で何か困りごとはないか。課題を見つけに行く。

事務所に座っているだけでは、情報は入ってきません。

また、課題解決には何が必要か。何が活用できるのか。自分で探しに行かないと誰も教えてくれません。

オンラインのセミナーや研修会などにも積極的に参加しています。

－今、気になっているDX機器－

【市】

今、気になっている機器・分野などはありますか。

【芳野氏】

今度は「食」の方ですね。具体的に言うと「とろみサーバー」です。「とろみ」って、ものすごく難しいんですよ。

「とろみ」のつけ方を間違えると玉になる、それで窒息したりとかということがあるんです。とろみを付けるのに、手間も時間もかかります。100ccのとろみを付けるのに、1人あたり2分かかったとして、それが10人分だと20分。それが、ボタンを押すだけで、簡単に、素早くとろみを作ることができる。新人であってもベテランであっても。効率化によって、生み出した時間を、入居さんとふれあう時間にあてる。少し車いすで外に出る。職員にとっても、少し気持ちが休まる時間にもなりますし、働き方も変わってくると思いますね。

－事業所同士のつながり－

【市】

サンシティ北条の取組みがクローズアップされることは、他の事業所さんにとっても刺激になるのではないですか。

【芳野氏】

僕は、商売敵といった感じではなく、逆にコミュニティを作りたいと思っています。同じDX機器を入れているところ同士で、「こんなことが困っているんよね」とか。話し合える場をオンライン上に作ったら、事業所同士の繋がりにもなる。今回導入したヘルプパッドでもそうです。メーカーさん(株式会社 aba)にお願いしているのは、県外の事業所さんであっても構わないので、ヘルプパッドを入れている事業所をオンラインで繋ぎましょうって。「こうやったらうまくいった」とか、「こうすればもっとみんなに興味関心を持ってもらえる」とか、「うちの施設では、このような人が検知率が悪いのだけど、みなさんはどうしていますか」とか。それをきっかけにお互いのコミュニケーションが広がる、実際に施設に行って話を聞きたいとかっていうこともあるでしょうね。やはり、横のつながりって大きいですし、繋がらないといけませんよね。

